

# 受難の三兄弟3

次男ソールと魔人カリゴ

岡野めぐみ

*Megumi Okano*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 高山しのぶ



目次

予兆	7
一 守るべきもの	29
どこから、どこへ	58
二 神が語ること	70
三 人間の視野	102
(ここから、どこかへ——)	124
四 そこにあるもの	133
回帰	183
あとがき	202





受難の三兄弟3

次男ソールと魔人カリゴ





## 予兆

ソールは上機嫌だった。

「ああ、赤ちゃん！ 赤ちゃんとってもかわいかった！ 全部全部ちっちゃくて、ふにふにで、ぷくぷくしてて！ 泣き声も、ふにゃあふにゃあつて！」

——マラキア王国ウーヌス王宮。

その前宮と後宮を結ぶ、緑の美しい庭に面した、<sup>ひとけ</sup>人気のない静かな回廊を、今にも歌い踊り出したくなるような心地そのままに声を立て響かせ、ふわふわとした足取りで進む。

「あんなにちっちゃいのに、むにむに動くって！ むにむにむにつて！ かわいい！ びっくりしちゃうくらいかわいい！ もう！ 思い出すだけですっ

ごく幸せ！——ね！ 閣下！」

そう言つて、くると勢いづいて振り返り、ぴよんと跳ねるよう<sup>は</sup>にして、後ろを歩いていた金髪の美丈夫の前に立つ。

と、彼——マラキア国王リベルム六世の第二王子にしてノティティア公爵トニトルス・アウルムは、珍しいものでも見るように目を瞬<sup>しばた</sup>かせて、意外だな、と言つた。

「驚くほど愛らしいのは認めるが、しかし、それほどまでに反応するとは思わなかった——常日頃からとにかく年上にべったりくっついてばかりの君が」  
ソールの九歳上の兄ウィルに、性別を全く気にすることなく心底惚<sup>ほ</sup>れ込んでおり、それ故にソールの



兄に対する執着をよく知っているトニトルスの皮肉混じりの言葉。

「いつもならば、この先皮肉の応酬になるところだが、

「え？ ボク、ちっちゃい子好きですよ」

ソールは真顔でついと首を傾げて見せ、次の瞬間、ふふふ、と相好を崩した。

「だつてかわいいじゃないですか、特に赤ちゃん！ だつこして、きゅつてして、よしよしして、全力で守つてあげたい！ ああ、赤ちゃんつて、何であんなにかわいいのかなあ……」

「生物の本能に因るものだろう」

「……妙に客観的というか、冷たいですね、閣下」

ソールが口を尖らせると、とはいえそれ以外に説明がつかない、と、トニトルスは頗る真面目な面持ちで言った。

「考えてもみるがいい、ソール。君や私のようなきわめて利己的な人間から、かわいいだの愛らしいだ

のという言葉易々と引き出し、あまつさえ庇護心を掻き立て、奮起させるのだからな」

面持ちとは異なり、本気とも冗談ともつかないその言葉に、ソールは眉根を寄せる。

「え、奮起？ 奮起つて……、もしかして閣下、赤ちゃんを——というか王太子殿下の御子様を出しに、何か企んでます？」

——十二年もの間、王太子の後宮を煩わせてきた静かな災厄。

それを乗り越えて、女騎士グラティア・フィグラへの想いを実らせたマラキア王国王太子アーカス・ヴィギリア。

彼と王太子妃となつたグラティアとの間に先月、第一子となる男児セルモ・アルタムが誕生した。

国の安寧の為、正統な王位継承が行われることを願っていたアーカスの異母弟トニトルスは、その後宮の問題の解決に一役買ったソールを王宮に招き、未来の王太子に引き合わせた。



——それが今し方のこと。

「あの、ボク、このあと予定があるんですけど」

「ああ、観劇だろう？ フィグラの第五子と」

さらりと言い当てられ、きよとんとしたソールは、目をぐっと細めて上目遣いに睨めつける。

「閣下、マイルスさんに会ったんですか？」

マイルス・フィグラ——王太子妃グラティアの実弟で、ソールが兄のウイル、弟のレクスと暮らすノティティア公領ナタリスの地方警備隊警邏長。

元々似たような日程で王都に所用があつた彼と一緒ににナタリスから出てきて、その実家であるフィグラ邸に滞在しているのだが、王太子一家への謁見以外に特に予定もないソールに対し、気晴らしにとマイルスが手配してくれた、今夜の観劇。

「……何かものすごくイヤな予感があるんですが」

「いや、安心していい。ソールが私との約束をすっかり忘れていたようで本当にすまないと、きちんとして謝罪して断つておいた」

「ああああ何で断つちゃつたんですか！ それもあたかもボクが悪いかのようによ！ そもそも閣下と約束なんてしてないじゃないですか！」

ソールとは反対に、マイルスは王都に来てからのこの四日間、王太子妃の実弟として、また、地方警備隊の警邏長として多忙をきわめており、就寝前の僅かな時間しか顔を合わせる機会がなかった。

「ボク、マイルスさんちに泊まつてるのに、マイルスさんにおかえりなさいとおやすみなさいくらいしか言つてないんですよ！ 今日やつと！ やつとゆつくりたつぷりお喋り出来ると思つていたのに、どうしてそんな意地悪するんですか！ 酷いです、酷すぎます閣下！ 性格が悪いにもほどがあるでしょう！ お芝居と、ご馳走と、マイルスさんとお喋りする時間！ 返してください！」

わあわあとそのようなことを喚いてみると、底意地の悪さなど微塵も感じさせない爽やかな笑みを浮かべていたトニトルスは、つと形の良い眉を寄せ、

呆れたように溜息を吐いた。

「私の性格が悪いというのは認める。しかし、君も大概自分本位で視野が狭くて思いやりがないな」

性格が悪いとまでは敢えて言わないでおくが、子ども好きというのはさっさと返上するように、と言うのに、ソールは怪訝に目を瞬かせる。

と、トニトルスは再びこれ見よがしな溜息を吐き、徐に口を開いた。

「私が君を王宮に招いたその理由、セルモ殿下に会わせる為だけだと思っていたのか？」

「え？ そうでしょう？ 違うんですか？」

「ソール……、ただそれだけであれば、私は君だけではなくレクスも王宮に招く」

まだ公のお披露目をすませていない、生まれて一月余りの王家の世嗣に拝謁することが出来たのは、王太子の後宮の正常化に協力したから——否、確かにそれならば、その時、ソールと同様に助力したレクスも招かれてしかるべきだろう。

思い至って、あ、と短く声を上げると、トニトルスは三度溜息を吐いた。

「レクスはいつもいつも君の意識の外だな。まだ十歳の、小さな弟だろうに……、子ども好きが聞いて呆れる」

もつともな言葉に決まり悪く視線を逸らして、だつて、その、レクス君って見た目はともかく中身は全然子どもっぽくないですし……、と、もごもごと言い訳めたことを口にしたあと、気を取り直してトニトルスを見遣る。

「つまり、セルモ様への謁見は、あくまで表向きということですか」

レクスにはない、ソールとトニトルスの接点。

「御用件は何です？ トニトルス先輩」

マラキア王国大学府歴史学部郷土史学科四回生としてソールが問うと、同じく魔法学部魔法倫理学科七回生トニトルスは笑みもなく頷いて切り出した。

「中央大陸研究室ナタリス遺跡群研究専攻の君に訊

きたい——我が国に魔力鉱床が存在する可能性はないのか」

ソールは目を睜り、そして、険しく細める。

「……選りに選ってどうしてそれを大学府ではなくわざわざ王宮で？」

魔力鉱床より採掘される魔力鉱石は、魔法の行使に利用出来る特殊な鉱物。

魔法について学ぶ学生がそれを求めるのは特におかしなことではない。しかし、トニトルスは国の中枢にいる王族であり、王国軍の大將軍でもある。

——魔法は学問の対象だが、この男の目的はそれとは限らない。

「先輩ではなく公爵閣下としてお訊ねならば、何を当たってくださいとしかボクは言えませんが」

「君のその子どもらしい潔癖さ、実に羨ましく、また好ましく思うよ」

トニトルスは口角だけを笑みの形に歪めた。

「『神とともにあつてはならず王のものともなるな

かれ』——正しく学徒である君が重んじる、我らがマラキア王国大学府の理念。私は平気でこれを踏みこむにじるが、かといって反逆の意志があるわけではない。私は王族であり軍人であり学徒でもある。大人というのは何ごとも単純に割り切れないものなのだ。さて、今一度訊こうか——我が国に未発見の魔力鉱床が存在する可能性は本当でないのか」

逡巡ののち、ソールは口を開く。

「わざわざ王宮でそれを問う理由を話してくださいなら、お答えします——とは言っても、ボクがそれに納得出来なければ、断固拒否しますけど」

ボクは子どもですからね——嫌味のようにそうつけ加えると、もう十五なのにな……、と、トニトルスはどこか哀れむような面持ちで徐に首肯し、そして、すつとその表情を引き締めた。

「では、単刀直入に言おう——近いうちに戦が始まる。相手はコルリスだ」

「……ああ、なるほど」

質問の意図を概ね察したソールは顔を擧める。

——中央大陸中央部、マラキア王国の北東に位置するコルリス王国。

山地の直中ただなかにある、平野に乏しい小さな内陸国。

気候は冷涼で、農業には不向きな土地柄だが、資源には比較的恵まれており、中央大陸の魔力鉱石の約四割はコルリスで産出される。質は今一つで等級外のものも少なくないが、しかし、コルリスにとっては幸いなことに、隣国のマラキアは世界最大級の魔力鉱石輸入国。コルリスの魔力鉱石輸出量のおよそ八割をマラキアが占めている。

マラキアの魔力鉱石輸入量に占めるコルリス産の割合は大体六割というところだが、これを魔力量に換算すると三割前後と決して大きくはない。そう、それは平時であれば切り捨てても大きな問題にはならない量。

だが、有事の際にその三割がなければ危機的状况おぞましいに陥る可能性が高い。

人間は未だ魔力そのものを動力として用いる技術を確立させてはいないが、かつて世界を支配した魔人と呼ばれる神々が創出した魔法や対物魔導構造まどうと呼ばれる機構——戦には決して欠かせないそれらは大量の魔力を要するが為に。

「また何を吹っかけられたんですか。マラキアは、コルリスから」

かつて大陸の再統一を目指したこともある中央大陸一の大国マラキアだが、今から二百年ほど前の大規模な内乱以降は国内の安定に努め、百年前、東の隣国オキユルスとの国境線を巡る対立を最後に、対外的な武力衝突は起こっていない。

内に守るべきものはあれど、外に求めるものは安寧の他にない——それが今のマラキア。

国内外ともに平和が続いているにも拘らずかかわ、魔力鉱石の産地という以外には何も無いコルリスに戦を仕掛けるとは、にわかには考えられない。

「近々戦が始まるとか何とか言いながら鉱床の当て

を訊ねてくるつてことは、かなり急な話で、しかも結構退つ引きならない状況だつてことですよね？」  
ソールの目の前にいる男は賢く、そして、権力にも恵まれている。

多少のことならば回避し果せるだろう彼が、真つ向から事を構えることを示唆する発言。

「何があつたんです？ らしくもなくうっかり失策でもしましたか？ 先輩」

心の底からではなく、からかい半分の言葉。

だが、

「失策……なのだろうな」

トニトルスは美々しい顔を苦く歪めて言った。

「え、先輩、ボクの今の、ちよつとした冗談のつもりだつたんですけど」

「残念なことに冗談でも洒落でもない」

そして、ソールを半眼で見つめたまま、ゆるゆると首を振る。

「今となつては失策だつたとしか言えない——とは

いえ、私だけが原因ではないのだが。何せ火種が生じたのは二十年以上前だからな」

「二十年以上前？」

今年二十六歳になる第二王子は頷く。

「正確には二十二年前だ」

「……と言うと、コルリスではちようどフォルム七世が即位した頃ですよね——」

コルリスの現国王フォルム七世。

暗愚の体現として未だ語り継がれる前のコルリス国王カロール二世によつて乱れた国を地道に立て直した、堅実にして善良な王。

「——これといつて悪い評判は聞かないんですけど、フォルム七世とは関係ないんですか？」

「いや、大いに関係ある。むしろ、フォルム七世の不可思議な要求がそもその元凶だ」

「どんな内容なんですか……？」

ソールが怪訝に首を傾げると、何とも言い難いのだが……と、トニトルスはどこか躊躇いがちに切

り出した。

「二十二年前、即位して間もないフォルム七世は、我が国に対して、マレ・カエルムの十六番地の領有権を主張し、マレ・カエルム大結界解除の為、ノティエイア公領ナタリス周辺域及び領海へのコルリス軍の立ち入り許可を求めてきた」

「……はい？ え……？ え？」

もう一度言おうか、と言うのに、いや内容はわかりました、と、ソールは慌てて首を横に振り、そして、傾げる。

「内容はわかったんですけど、その、意図が全くわからないというか……」

——マラキア王国南西部、ノティエイア公領西端にある古の都市国家マレ・カエルムの大魔墟。

碧玉の魔人カエルレウスが長く統治したその国は、神々がこの世界から消え去ったあと、最後の神託によって民が去り、そののち、人々の知らぬ間に不可侵の結界に包まれて今に至る。

世界最大の宗教、魔人カエルレウスを信奉するカ

エルレウス教団はそこを聖地とし、またマラキア王国の一部として認めているが、解除が途方もなく困難な結界に阻まれて、誰も踏み込むことの出来ない魔墟の価値などないに等しい。強いて言うなれば、巡礼者の路銀で街道沿いの町や村が多少潤い、また巡礼者の護衛費名目で教団から年単位で一定額が国に振り込まれるという程度。

その額、決して微々たるものとは言わないが、しかし、諸経費を考えると大きな益にはならないそれを狙うほどコルリスも貧しくはない。

否、たとえそうだとしてもだ。マレ・カエルム全体の領有を主張するならともかく、どうして限定的なのか。

「マレ宮殿やカエルム要塞ならばまだわかりませんが、十六番地ついでという、最後の神託直前のマレ・カエルム市街図に拠れば貴族街の真つ直中。ヴィテイウム伯爵邸しかありませんけど」

「さすが、よく知つてゐるな、ソール」

「こんなの教養未滿の基礎知識ですよ。大体、記録資料を調べればすぐにわかることですし」

片眉をつり上げたトニトルスを一瞥いちべつしたソールは、空中に視線を向け、さつと記憶を漁あさる。

「マレ・カエルム崩壊時のヴィティウム伯爵家当主はミセリアという女性ですね。しかし、最後の神託直後行方不明になり、また後継者も縁者もいなかった為、断絶しています。もつとも、マレ・カエルム貴族の末路としては珍しいものではありませんけど——で、フォルム七世は、そのヴィティウム伯爵の末裔まうえいだとも主張しているのですか？」

概ねそんなところだろうと思いつつ視線を戻すと、予想に反してトニトルスは苦みの強い笑みを浮かべて首を振った。

「いや、そのように主張されれば、まだいくらか考慮していたかもしれない」

「え、考慮していたかもしれないって——」

ソールは目を瞬かせる。

「——あの、先輩、マレ・カエルム崩壊つて千年前なんですけど」

「もちろんわかつてゐる。要は、千年前に滅んだ家の末裔を今更名乗つてくる方が、まだ信用出来るということだ」

「何て言つてきてるんです？」

「大結界を解除して、そこを訪れたならば、必ずやそこは私のものだ証明される」

——明らかに通る方がおかしい主張。

それは酷い、と、ソールが半眼かつ口を半開きにする、トニトルスは、

「二十二年前から一貫してこれだ。そこ、何があるのかと訊ねても、ただ口を閉ざし、到底受け入れ難いと断ると、いやにすんなり引き下がる。内容が内容で、また先方もそのような態度だから、これまで全く相手にしていなかったのだが——」

そう言つて長い溜息を吐き、そうして重々しく続

けた——それが一年と少し前から急に強硬になつてきたのだ。

「一年と少し前……、何かあつたんですかね？」

「いや、コルリスでは取り立てて動きはなかつたという報告を受けている」

妙に引つかかる物言いに、コルリスでは、と、ソールはなぞつて怪訝に眉を顰め、

「我が領内、いや、我が国ではありすぎるくらいにあつたではないか——主に君の所為で」

そのようにトニトルスに言われて、あ、と声を上げ、頬を引きつらせた。

——そう、およそ一年と数ヶ月ほど前。

生まれつき魔力を持たない弟レクスの就学問題を解消するというのを建前に、ソールはレクスを連れて異界渡りを行い、妖精世界へと飛び込んだ。

その実、物見遊山がしたかっただけという邪な本音が【支配者なき魔力空間】から招いたのは、魔物と呼ばれる高等魔導生物。

何とかそれを退けて、レクスの「魂の双子」である妖精姫アウラを得、そうして就学問題は一応の解決を見たのも束の間、その魔物討伐がきっかけとなつてトニトルスが、ソールたちの兄ウィルを見初め、妃にするなどと言ひ出して驚くべき行動力でそれを実行。そこに王太子の後宮問題が絡まつて織りなされた悪夢のような日々。

結果、マラキア王家は次代の王太子となる男児を得たとも言えるが、それにしても、終わりよければすべてよしというには、多少ならず痛々しい記憶。

「でも、いくら何でも、それとコルリスが強硬になつた件は全然関係ないと思うんですけど……」

おずおずとソールが言うと、トニトルスは、まあそうだろうが、と一旦は領いて、渋い顔をした。

「だが、あの魔物討伐のあと、何日もしないうちにコルリス側が大結界解除の協力を拒否すれば武力行使も辞さないなどと言ひ出したのだ。しかも、引き下がる様子は皆無。先方はどうあれ、こちら側は



色々同時進行になって、随分と骨が折れたよ」

「……あの……、先輩？ きっかけはともかく、そこから先はどう考えても先輩が勝手に抱え込んだだけのような気がしますか？」

魔物討伐を余儀なくされ、その事後処理とコルリスの件が重なったのは不幸な偶然だったにせよ、そこから先、ウィルを巡って無謀に無謀を重ねたのは、他でもないトニトルス。

一年以上も前のことながら、ざっと思い出すだけでも未だ否応なしに頭痛を引き起こしそうな、その無謀の水面下で、実はコルリスとも事を構えていたというのは、尊敬に値するような気もしたが、しかし、やはり無謀は無謀。

「いつそ兄さんのこときれいさっぱり諦めてしまえばよかったのに……」

「何を言っている？ 諦めるなど不可能に決まっているだろう。私がどれだけウィルのことを愛していると思っっている」

「そんなこと真顔で言われても困ります。顔寄せられても困ります——最早国王陛下公認で誰も口挟めないどころか、かわいい女の子が好きで、なおかつ自分よりも見た目が男らしい男は身内以外もれなく死に絶えろって内心願ってる当の兄さんですら一種の諦めの境地に達するくらい、アナタが兄さんのことを好きだってことは、知りたくもないのを知っていますから離れてください」

ソールが両の掌を突き出して顔を背け、早口で言うと、それならばよい、と真面目な面持ちで頷き、寄せてきていた顔を離れたトニトルスは、  
「ともかく、愛しいウィルを諦めるのは当然のこと、そうかと言って後回しにも出来なかった」

そう言っ、目を伏せがちにして首を振った。

「何ごとにも時機というものがある——あの時、行動を起こさねば、私はウィルを側近くに置いて愛でることなど生涯叶わなかっただろう。たとえ一時のこととなっても、この手許に置くにはああするしか

なかつた——」

ウイル・インペタスはマラキア王国第一級従軍魔導士——王国最大級の魔導兵器<sup>〴〵</sup>。

弟たちの為に軍籍を離れ、ナタリス村長預かりの身、いわば籠<sup>かご</sup>の鳥<sup>〴〵</sup>となつていた彼を、トニトルスは一計を案じて籠<sup>ナタリス</sup>から出した。

もつともそれは長くは続かず、ほどなく偽りが露呈して、二人は別離を迎えたものの、しかし、決して叶わぬはずだった二人だけの時間を手に入れ、さらには鳥<sup>〴〵</sup>がどこにしようとも、誰のものであるかということ世間に広く知らしめたということから考えると、トニトルスにとつては限りなく最良の結末だったのでないかとソールは思う——ウイルの弟としては理解も納得も出来ないが。

「——それに、万が一、ウイルのことを後回しにしていたら、リタニア教授の協力を取りつけることも出来ていなかったかもしれない」

「え？ リタニア先生？」

突然出てきた思わぬ名前に首を傾げたソールだったが、すぐにトニトルスの言わんとするところに思いついたり、あ、と眉を顰めた。

「そうか……、アナタがあの時先生に目をつけたのは偶然なんかじゃなくて、コルリスとこのことを見越して……」

——魔導学部魔導工学科魔力鉱石研究室の正教授リタニア。

接する機会など教養の講義を除けばまずない、魔導工学科の教授である彼女と魔法倫理学科の学生であるトニトルスを引き合わせたのは、ソールが書いた始末書——妖精世界で魔物と戦うことになった弟たちの為にウイルが張った巨大かつ問題だらけの結界魔法を分析した論文並みのそれ。

その検算部隊の陣頭指揮<sup>じんとうしき</sup>を偶々執<sup>と</sup>ることになったリタニアは、ウイルを手に入れるという腹案の下でソールの不祥事の後始末の為に積極的に動いていたトニトルスに打ち上げの席で捕まり、そして、かつ

て実現不可能として打ち切りながら、破棄出来ず仕舞い込んでいた自らの研究を、蒸し返され突きつけられる。

リタニアが発見した特殊な魔力鉱石である魔力発動体、それを動力の一部とする輸送用の魔導技術開発——軍事利用も可能なその研究。それを王国軍の大將軍だが一学生にすぎないトニトルスとともに行い、万が一公に露呈すれば、教授であるリタニアがトニトルスに取り入って唆したと見なされる。

それにも拘らず彼女は、魔力軌道車とトニトルスが勝手に名づけたその魔導技術の再開発に着手した。「リタニア先生は捨てざるを得なかった魔力発動体の利活研究をずっと気にかけていた。それが日の目を見るかもしれないってだけでも先生は動くのに、アナタはコルリスとの戦争という具体的な活用案まで示して、完全に取り込んだんですね」

端正な顔に麗しい笑みを浮かべ、躊躇うことなく頷いたトニトルスをソールは睨める。

「妙だなと思つてたんですよ。軌道車の通常制動の目処が立った途端、急制動の問題解決を早々に断念して開発計画期間を大幅に繰り上げたこともですが、何よりも王太子殿下の後宮の騒動が収まったその前後くらいから、リタニア先生の出張回数が増え、急に増えましたよね？ 最初は軌道車の開発の為かな、と。でも、魔石研のフラスコ先輩にそれとなく話を振つてみたら、先生の出張は買いつけじゃなく新規開拓だつて言うじゃないですか」

大学府の教授のなかでは若手のリタニアだが、魔力鉱石研究に関しては国内で彼女の右に出る者はおらず、また魔力鉱石の取引においても強いつながりを持つている。

「開発計画からすると、軌道車の実用化から実際の運用に至るまでに必要な魔力鉱石は、元々先生が確保していた経路で十分に賄えます。なのにどうして新規開拓しなければならぬのか——」

トニトルスはただ笑んだまま答えず、まあいいで

すけどね、と、ソールは息を吐く。

魔力鉱石の新たな取引経路は開戦後、トニトルスもとい国に明け渡す——そういう約束なのだろう。そう、おそらくは魔力軌道車の研究開発協力と引き換えに。

権力とは距離を置く大学府といえども、有事となれば話は別。

事前に明るみに出さえしなければ咎められることはなく、そして、首謀者といふべきトニトルスは、その程度ならば造作なく隠蔽し果せる。

だが、

「結局のところ、先輩がボクを呼びつけた理由って何なんですか？」

中央大陸の西、セリア諸島のブッカ鉱山と、同じくゲーナ鉱山——三月ほど前にフラスコが言っていた、リタニアが得た新たな取引先。

どちらも小さな鉱山だが、数年前、比較的高等級の魔力鉱石を産出する鉱脈が新たに発見され、年間

採掘量あたりの魔力量は双方とも二倍ほど増加。

元々の採掘量が多くはない為、最大限に取引を行ったとしても、これらの鉱山だけで有事の際の不足分を補うことは出来ないが、しかしながら、セリア諸島からマラキア王都ウーヌスまでの輸送日数は約二十日余りと短く、備蓄量に不安が生じた場合は、両鉱山で一先ず必要分を確保出来る。

「戦う相手が東のオキュルスというのなら不安にもなりますが、コルリスですよ？ 現状からして国内に鉱床がなくとも、切り抜けれそうな気がしますけど」

トニトルスは笑みを消し、徐に口を開いた。

「セリア諸島産に異常が見つかった」

「異常？」

「内包魔力量の欠乏——規定値の半分以下、酷いものになると五分の一未満。しかも、出荷時は規定値以内にも拘らず」

ソールは瞠った目を怪訝に細める。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。